

鳥取県方言における「-なさる」系敬意形の音韻派生について

桑本裕二

(松江工業高等専門学校)

【要旨】本稿は、鳥取県方言の、中央語の「-なさる」が想定される敬意形「-なる」「-ない」(中・西部方言)および「-んさる」「-んさい」(東部方言)の音韻派生を推定し、両者の通時的関連を検討したものである。中・西部方言の断定形は、中央語「-なさる」から古形「-なはる」を経て「-なる」が派生したと推定できる(/s/ > /h/ > φ)。命令形「-ない」は、古形「-なれ」を経て、元々中央語の「-なされ」から「-なはれ」を経て派生したと推定できる。東部方言の「-んさる」「-んさい」は中央語「-なさる」からの /a/ 消失と推定できるが、以降に想定される /s/ > /h/ > φ の子音弱化は音素配列上回避され、ここから「-なる」「-ない」は派生できなかった。以上の分析から、中・西部方言の「-なる」「-ない」と東部方言の「-んさる」「-んさい」の間には通時的派生関係は認められないということが導かれる*。

キーワード：鳥取県方言、敬意表現、-んさる、-なる、子音弱化

1. はじめに

標準語での「-なさる」系の動詞敬意表現形、例えば「書く」に対して「書きなさる」のような語形が想起される方言形として、「書きなる」「書きんさる」といった語形が、中国5県に幅広く分布していることが桑本(2022b, c)で報告されているが、特に鳥取県内においては、中・西部方言(伯耆方言)と東部方言(因幡方言)ではっきり相補分布をなしている(桑本2022a, b, c)。桑本(2022b, c)は、中国5県という広範囲にわたる地域内での「-んさる」型と「-なる」型の共時的な分布状況を示し、特に山陰側と山陽側の特徴の対立を検討したものであったが、両語形相互の通時的な派生関係やその影響の方向などに関しては言及されていない。

本稿は、考察の対象地域を鳥取県内に限定し、現在、中・西部と東部で相補分布している同系の敬意形「-なる」と「-んさる」に対して、相互の通時的な音韻的派生やその方向について考察したものである。結論として、鳥取県中部の周辺部(東伯郡域)に残る古形「-なはる」を考慮することにより、中・西部方言の「-なる」と東部方言の「-

* 本稿は、関西音韻論研究会(PAİK)2022年4月例会(2022年4月23日、オンライン)における口頭発表に基づき、加筆・修正を施したものである。また、本論考の着想に関しては、山岡翔氏(日本学術振興会特別研究員(大阪大学))の指摘に負うところが多く、感謝申し上げる次第である。また、2名の匿名の査読者の方にはいくつかのご指摘をいただき、細部の不明瞭な点を解消することができた。記して感謝申し上げる。

んさる」との間には通時的な派生関係は存在しないことを導く。

なお、本稿は、筆者が2021年12月から2022年2月にかけて行った複数回、複数地点での聞き取り調査の結果を反映したものである。

2. 鳥取県における「-んさる」と「-なる」の分布について

2.1. 中国5県における分布について

「書く」の敬意形として、「書きんさる」「書きなる」などの語形は、標準語の「書きなさる」というやや古い形が想起されるものである。中国5県（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）の全域において、これらの語形またはそれに類する形については、鳥取県（室山 1982, 1998）、島根県（神部 1982、友定他 2008）、岡山県（虫明 1982、吉田 2018）、広島県（神鳥 1982, 1998）、山口県（中川 1982）に関する記述をまとめ、桑本（2022b, c）による全地域の現状を示す調査結果に基づくと、以下のようになる。

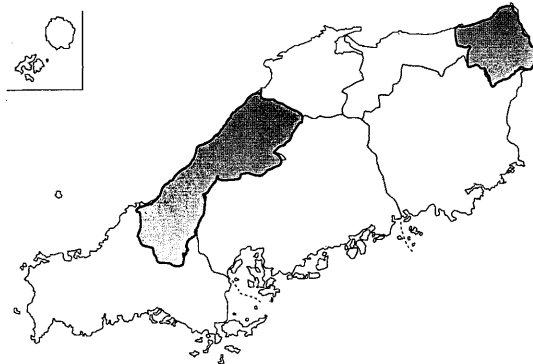


図1 「-んさる」の分布（桑本 2022b,c）

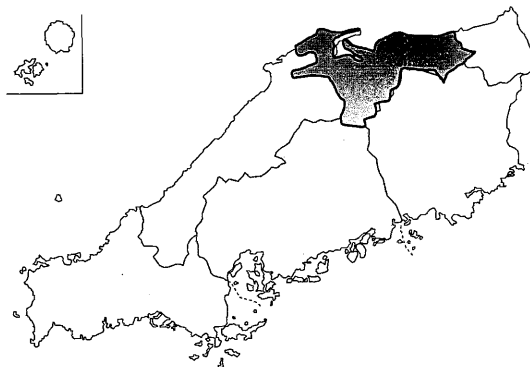


図2 「-なる」の分布（桑本 2022b,c）

「書きんさる」のような「-んさる」型に関しては、図 1¹のように、鳥取県因幡地方（東部方言）と島根県石見地方に分布し²、「書きなる」のような「-なる」型は鳥取県の伯耆地方（中・西部方言）および島根県出雲地方東部にあたる安来市、松江市に分布している（図 2）³。つまり、「-んさる」と「-なる」は、鳥取、島根の 2 県（山陰 2 県）において、相補分布をなしていることがわかる（ただし、島根県出雲地方西部および隠岐地方は「-んさる」「-なる」型の敬意形の空白地帯となっている）。

この「-んさる」「-なる」に対しては、「書きんさい」「書きない」のように、「-んさい」「-ない」が後置される、やや丁寧な命令を表す語形がある（桑本 2022a, b, c においては、これを「敬意命令形」と呼び、「-んさる」「-なる」を「敬意断定形」として区別している。本稿においてもこの用語を用いることとする）。

図 3 は「-んさい」、図 4 は「-ない」の分布を示すが、これらと図 1, 2 を比較すると、敬意命令形は、敬意断定形よりも広範囲に分布していることがわかる。



図 3 「-んさい」の分布（桑本 2022b,c）

¹ 地図については、ライブドアブログ「働きアリ」Social S 県別地図と特徴 (4)（中国：岡山・広島・山口・島根・鳥取）(<https://livedoor.blogimg.jp/aritouch/imgs/6/7/6747b577.jpg>) より無料ダウンロードした。以下の中国 5 県の地図も同様。

² 神部 (1982:131, 1998:43) は、広島県全域に「-んさる」があるものの、郡部の老年層に限られるとしている。桑本 (2022a, b, c) の調査で、広島県内で「-んさる」は確認されなかった。

³ 神部 (1982:228) は、石見地方にも「-なる」があるとしているが、桑本 (2022b, c) の調査では確認されていない。神部 (1982) の記述は現在の調査結果とは異なるものとなっている可能性がある。

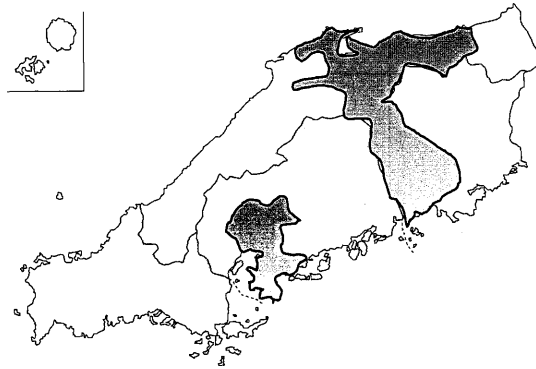


図4 「-ない」の分布 (桑本 2022b,c)

「書きんさい」のような「-んさい」型は、島根県の最東端の安来市を除く全域（出雲、石見、隠岐）、広島県全域（備後、安芸）、山口県全域（長門、周防）と、鳥取県因幡地方（東部方言）にあり、「書きない」のような「-ない」型は、鳥取県伯耆地方（中・西部方言）、島根県出雲地方東部（安来市、松江市）、岡山県備中地方⁴、広島県安芸南部地方に分布している。

これらの図に従えば、「-んさい」型と「-ない」型の使用が併用されているのは島根県松江市と広島県安芸南部地方のみである。松江市の場合は、東接の安来市が「-ない」のみの地域、西接の出雲市、南接の雲南市が「-んさい」のみの地域であり、両語形が交錯しているという可能性がある⁵。広島県安芸南部地方の場合は、筆者が広島県呉市方言話者に対して行った調査⁶の結果、「-ない」（または「-ないや」）は当人らは全く使わず、インフォーマントのうち一人の言では、祖母（1945年以降生まれ）がいるが、祖母の会話にも聞いたことがないとのことであったので、現在はほぼ消滅した語形であると推察でき⁷、両地点共に本稿ではあえて考慮しないことにする。以上の配慮によって、島根県松江市と広島県安芸南部地方の場合を除外し、敬意

⁴ 調査地点は岡山県総社市（桑本 2022b, c）。なお、当地では、/ai/ > /æ:/ の母音融合の結果、「書きねー」「し（為）ねー」となる（虫明 1982:65）。

⁵ 調査は2021年12月に行い、分析結果は桑本（2022b, c）で報告している。

⁶ 2022年1月にZoomによって広島県呉市方言話者（10代1名、20代2名、全て女性）に対して行ったもの。詳細は桑本（2022a, b, c）を参照。

⁷ 広島県安芸南部地方における「-ない」は、映画『仁義なき戦い』（1973、東映）（および他3作品）のなかに豊富に表れるため、少なくとも広島県呉市および広島市におけるこの映画作品の映像音声のなかでは「-ない」は当該地の方言語彙として存在するものとみなせる。当映画の公開時期、脚本執筆時期、映画のストーリー上の設定年代などを考慮すると、当映画の言語使用（方言使用）は、現在から50年ないし70数年前の実態を反映しているものとすることができる。映画『仁義なき戦い』の映像音声の示す、一時期、一地点における「-んさい」「-ない」の併用は、山陽3県内で唯一のものとして無視することができない。そのため、「-ない」の分布地点として図4にあえて明示した。

断定形同様、敬意命令形も、中国地方のなかでは相補分布をなしているとみなすことができることになる。

敬意命令形は、他人に指示をする表現でありながらそこに敬意を込めるという、やや複雑な表現形式であると考えられる。特に鳥取県の「-んさい」「-ない」は、実際には主に女性が（室山 1998:20）子供に対して優しく諭すなどの場合に積極的に用いられることが知られている（桑本 2022a, c）。また、広島県呉市では、幅広く「-んさい」が使われるものの「-んさいや」のように「や」が付されるとややぞんざいとなり、「荒い」「きつい」というニュアンスが付されるようである⁸。広島市における「-ない」は、職人の集団で使われる（神鳥 1998:43）。映画『仁義なき戦い』シリーズの映像音声により、「-んさい」および「-ない」の使用状況を分析すると、上下関係、師弟関係、親疎関係が厳格であるなかで、上位の者に悪態をつくとか、下位の者が疎遠な者にいくばくかの敬意を払うというストラテジーとして用いられているのがわかる（桑本 2022d）。

2.2. 鳥取県内での分布について

2.1.節の図 1~4 から明確であるとおおり、敬意断定形と敬意命令形のどちらの語形も備わっており、なおかつ両者の分布が一致している唯一の地域は鳥取県である。また、「-なる」と「-ない」、「-んさる」と「-んさい」の分布している地域が全く重なっていて、両者が相補分布していることも特徴的である。

森下 (1999:11) の図：「尊敬の助動詞「れる」「られる」の方言」を書き直したものを図 5⁹に挙げるが、「-なる」または「-なー」などの同等の語形の分布と「-んさる」は鳥

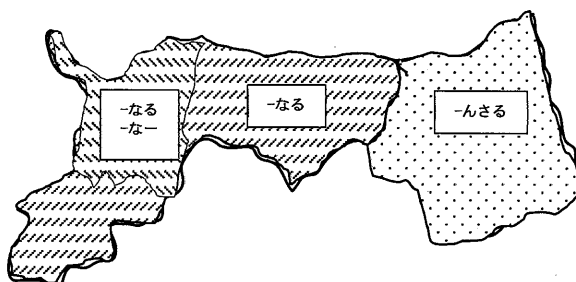


図5 鳥取県域の「-んさる」「-なる」の分布（森下1999:11をもとに改変）

⁸ 筆者の行ったインフォーマント調査に基づく。

⁹ 以降、鳥取県の白地図については、「「地図・路線図」職工所 鳥取県の白地図イラスト無料素材集（県庁所在地・市町村名あり）」（<https://www.chizu-seisaku.com/shirochizu/shirochizu-j-tottori/>）より無料ダウンロードした。

取県中・西部地域と東部地域とははっきり分かれて分布しているのがわかる。

鳥取県の方言区分は、森下 (1999)、室山 (1982) などに基づけば、図 6 のように、西部方言 (伯耆西部)、中部方言 (伯耆東部)、東部方言 (因幡) に 3 分される。アクセントに関しては (I) の境界が優先的なものとなり (桑本・儀利古 2016、桑本 2015, 2021)、語彙に関しては、(I) を境界として「西部」対「中・東部」、(II) を境界として¹⁰「中・西部」対「東部」となるものの 2 分が可能であるが、敬意表現の「-なる」対「-んさる」に関しては (II) の境界が優先的に明確な区分とされているのがわかる。

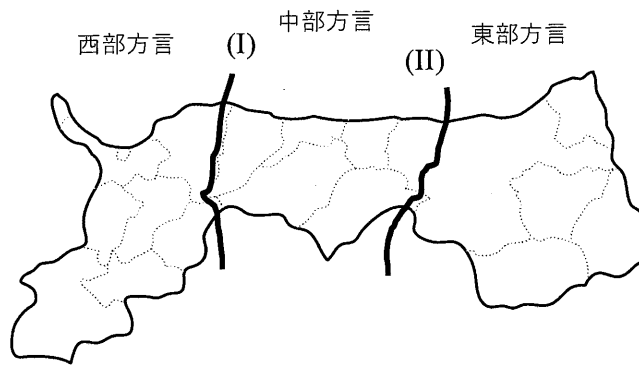


図 6 鳥取県の方言区分 (森下 1999:18 より)

3. 調査について

本稿に関わるインフォーマント調査は、全て直接対面または電話により、2021 年 12 月から 2022 年 2 月の間に行われた。詳細は表 1 に示すとおりである。

表 1 インフォーマントの情報

	出生地	出生地と異なる現在の居住地	年齢 (年代)	性別	備考
A	米子市		10	男	
B	倉吉市	米子市	50	男	成人後現在の居住地
C	西伯郡大山町	東伯郡琴浦町	70	女	成人後現在の居住地
D	倉吉市		70	女	
E	東伯郡三朝町	倉吉市	80	男	成人後現在の居住地
F	倉吉市		50	男	
G	岩美郡岩美町		40	男	
H	鳥取市		50	男	

¹⁰ (II) の境界は因幡国と伯耆国の国境には一致しない。因幡地方にあたる旧気高郡 3 町 (気高町、青谷町、鹿野町。現在は鳥取市に合併) は方言区画では中部方言に区分される (森下 1999:18)。ただし、室山 (1982:180) は、境界付近の語彙分布は微妙なものがあると明記した上で、旧気高郡は東部方言の区画と考えている。

調査は、インフォーマント本人に関しての他、「自分の家族、隣人等、周囲でそのような言い方を聞いたことがあるか」といった、出生地の言語状況と、居住地に長年住んで経験した言語実態の聞き取りであったので、インフォーマント B、C、E のようにネイティブではないが長年居住している地域や、現在の居住地とは違う出生地の言語状況もデータとして加味されている。上記 8 名のインフォーマントから聞き出した言語状況を示す市町村は図 7 のとおりとなり、鳥取県内の比較的広範囲、特に東西方向には連続した地帯を網羅していることがわかる。

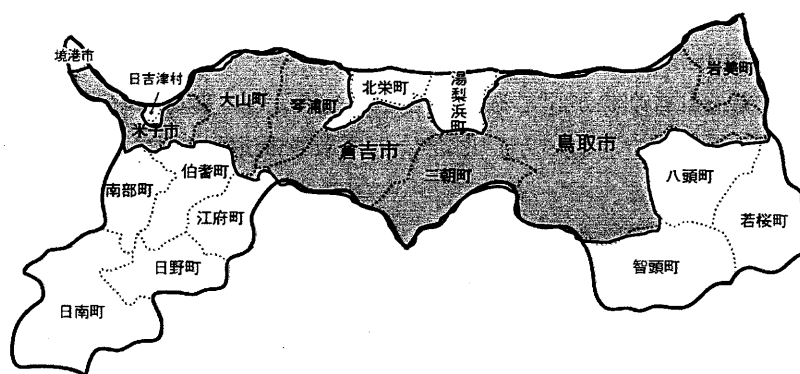


図7 インフォーマントの出生地・居住地（市町村別）

4. 鳥取県中・西部方言における敬意形の音韻派生について

4.1. 敬意断定形「-なる」および「-なはる」の分布と派生関係について

前節図5に示したとおり、鳥取県中・西部方言においては敬意断定形は「-なる」が主流である。文献による「-なる」の具体的な観測地点は、東伯郡三朝町若宮方言（室山 1982:201）、米子市夜見新田方言（室山 1998:21）などが示される程度であるが、筆者の調査での聞き込みの結果として、図5、ひいては森下（1999）の分布図が示すとおり、当該地域で広範囲にわたって主流であるとみなすことができる。

一方、当該地域に「-なはる」という語形が散発的に観察される。上記東伯郡三朝町若宮方言に「-なはる」（室山 1982:201）、米子市夜見新田方言に「-なはー」（室山 1998:21）があるとの記述がある。前節表1のインフォーマントの中では、C、D、Eから「-なはる」の存在を確認している。純粋な倉吉市方言話者であるDに対する聞き取り調査によると、「自分も含めて自分の世代は言わないと思う。ただし、20年くらい前までは自分より上の年代の世代に限り発話を聞いたことがある」と答えたことと、Cの現在の居住地（東伯郡琴浦町）、Eの出生地（東伯郡三朝町）などから考えると、「-なはる」は、

鳥取県中部方言の中心都市である倉吉市の周辺の町村に散見され、倉吉市内ではもはや高年層の一部に使用されるに留まっている¹¹。つまり、鳥取県中部地区においては、中心都市倉吉市では「-なる」が主流で「-なはる」は古い形として高年層¹²の間と、周辺地域の東伯郡域（三朝町、琴浦町など）に、「-なる」の古い形として残っているということになる。両者を音韻的に対照すると、「-なはる (-naharu)」に対し、「-なる (-naru)」は音節 .ha. が欠如していることになるが、上記のように両者の通時的、共時的分布の状況からして、-na<ha>ru (-なはる) > -naru (-なる) という脱落が音韻過程として起こったものと推定できる。なお、「-なはる」と中央語の対応語形「-なさる」との対照では、「-なはる (-naharu)」は、「-なさる (-nasaru)」から /s/ > /h/ という Place 消失の子音弱化が起こったことが明らかであり、「-なさる」>「-なはる」の通時変化が起こった結果であることが推定できる。「-なはる (-naharu)」から「-なる (-naru)」に対しては、/h/ > φ の子音消失と母音削除が起こる。以上をまとめると、鳥取県中・西部方言（特に明確には中部方言に限定されるが）において、敬意断定形においては、中央語の「-なさる」から、「-なさる」>「-なはる」>「-なる」という通時的変化を推定することができる（図 8）。音韻的には、/s/ > /h/ > φ という普遍的な子音弱化の過程が起こったものとみなすことができる。

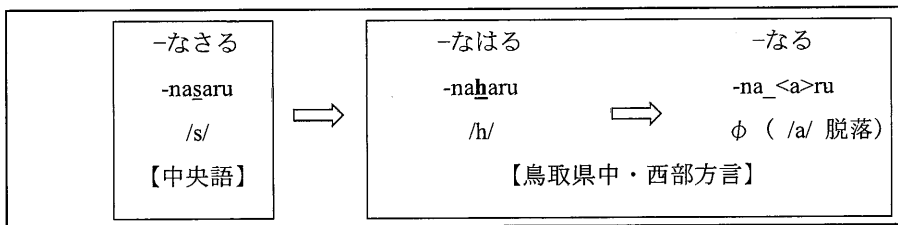


図 8 鳥取県中・西部方言（より厳密には中部方言）の敬意断定形の通時的派生の推定

4.2. 敬意命令形「-ない」と「-なはれ」「-なはい」「-なれ」との派生関係について

鳥取県中・西部方言における敬意命令形は「-なる」と関連した「-ない」が主流である。「-ない」については先行研究で言及されることはほとんどなく、森下 (1999:11) の分布図に敬意命令形がリストアップされていないばかりか、室山 (1998:20) に「女性が「カキナイ」（書きない）」「シナイ」（し（為）ない）などの言い方をする」という記述がある程度である¹³。しかしながら、第 3 節で示した調査の限りでは、鳥取県中部、西

¹¹ 中年層 F（倉吉市内で理髪店を営業）は、ここ 1、2 年のごく最近でも、70 歳以上くらいの高年層に限り、「-なはる」の出現を確認しているとのことである。

¹² 倉吉市出生で倉吉市方言話者の中年層 B、F は、もはや「-なはる」を使うことはないということを確認した。

¹³ 同箇所の記事には地域の特定もなされていない。

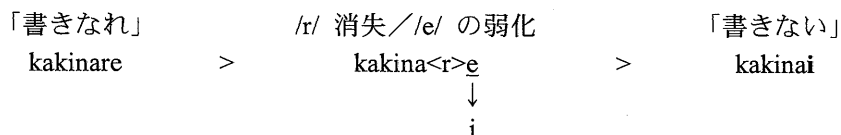
部の調査地の全域で敬意断定形「-なる」に対応する敬意命令形「-ない」が観察されるのがわかる。

さらに、やや古い形として「-なれ」が存在する。中年層以下ではほぼ使われなくなった形であるものの、倉吉市の周辺部の東伯郡内（三朝町、琴浦町など）では倉吉市内に比べて、現在もなお、やや使用頻度は高い。

- (1) a. 書かない／書きなれ 「書きなさい」
 b. し（為）ない／しなれ 「しなさい」

(1) における「-い」-i と「-れ」-re の交替は「-れ」の方が古い形であることから、-re から ① /r/ の消失、② /e/ の /i/ への弱化 が起こったものと捉えれば、/re/ > /i/ の音韻変化が起こったものと推定することが可能である (2)。

- (2) 「書きなれ」から「書かない」への音韻変化の推定



この /re/ > /i/ の音韻変化は、中央語における「書きなされ」>「書きなさい」という古語形から現代語形への変化についても同様に扱うことができ (3)、また、敬意断定形「書きなはる」を基にした敬意命令形「書きなはれ」と、その派生形と考えられる「書きなはい」についても同様の音韻過程をあてはめることが可能である (4)。

- (3) 中央語： 書きなされ kakinasare > 書きなさい kakinasai
 (4) 中・西部方言： 書きなはれ kakinahare > 書きなはい kakinahai

鳥取県中・西部方言の敬意命令形の「-ない」または「-なれ」について、中央語からの通時変化を推定すると、図8で示した、敬意断定形「-なる」が「-なはる」を経て、元々中央語の「-なさる」から派生したことに基づけば、①中央語「-なされ」>方言形「-なはれ」>「-なれ」と②中央語「-なさい」>方言形「-なはい」>「-ない」の2種類の派生過程が想定できる。

方言形「-なはれ」「-なはい」「-なれ」「-ない」のうち、調査の結果、「-なはい」は最も使用頻度が少なく¹⁴、「もし言うとするれば言えるかもしれない」といった程度の印

¹⁴ ただし、室山 (1982:201) には「ナハイ」に関する記述がある。しかし同箇所には「-れ」語

象であった。そのことからすると、「-なはい」は、「-なさい」から /s/ > /h/ の子音弱化の結果と考えるよりも、「-なはれ」からの語尾の弱化が散発的に起こった結果と考えられる。「-ない」がその出現頻度の低い「-なはい」からの /ha/ の脱落と考えるよりは、(2) の音韻過程を経た結果と考えるのがより妥当な解釈であるといえるのである。つまり、中央語「書きなされ」 > 「書きなさい」と、方言形「-なはれ」 > 「-なはい」、「-なれ」 > 「-ない」に起こった語尾の弱化は、図 8 の /s/ > /h/ > φ の音韻過程より時間的に後に起こったものと考えられ、その結果、-i 語尾の諸形「-なさい」「-なはい」「-ない」の間に派生関係は想定され得ないことになる。図 9 に中・西部方言の敬意命令形の推定される通時変化をまとめる。

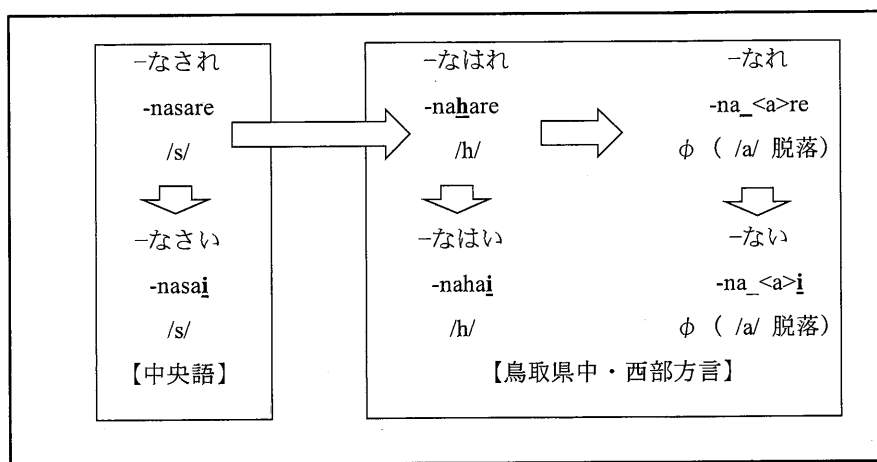


図 9 鳥取県中・西部方言の敬意命令形の通時的派生の推定

5. 鳥取県東部方言における敬意形の音韻派生について

2.2節 図 5 に示したとおり、鳥取県東部方言における敬意形は、断定形は「-んさる¹⁵⁾」であり、それと語形上関連する命令形は「-んさい」である。2.1節で述べたとおり、断定形「-んさる」は山陰にのみ分布し、鳥取県因幡地方の他には島根県石見地方にあり(図 1)、「-んさい」は、中国 5 県内では島根県、広島県、山口県の全域に幅広く使用域が広がっているものの、鳥取県、岡山県の中国東部域では鳥取県因幡地方だけが使用域となっている(図 3)。つまり、また、鳥取県内では、中・西部方言の「-なる」「-ない」と東部方言の「-んさる」「-んさい」は完全に相補分布をなし、さらに両地域で敬意断定形と敬意命令形が共存するが、これは中国 5 県のなかでは唯一の地域となっている(桑本 2022b, c)。

尾形に対する記述はない。

¹⁵⁾ 鳥取県東部方言の「-んさる」に関しては、先行文献のなかでは、室山(1982:198f., 1998:21)に「ンサー」として記述があるものの、具体的な地域分布についての記述はない。

鳥取県東部方言の敬意断定形「-んさる (-nsaru)」は、中央語の「-なさる (-nasaru)」との関連を考慮すれば、/a/ の消失によって形成されていると考えることができる。

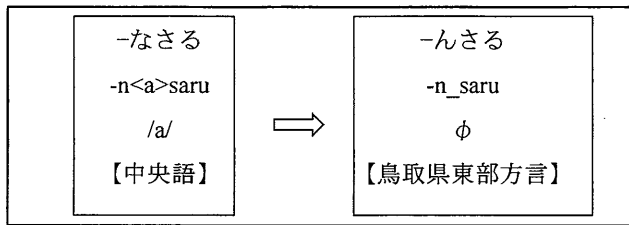


図 10 鳥取県東部方言の敬意断定形の通時的派生の推定

東部方言では、「-んさる」から /s/ > /h/ を経た「*-んはる」は存在しない。これは、「*-んはる (*-nharu)」が形成されると生じる -nh- 連続を回避した結果であると考えられる。そのため、さらにその /h/ が消失して形成され得る「-なる (-naru)」は、「-んさる」からは派生しない。

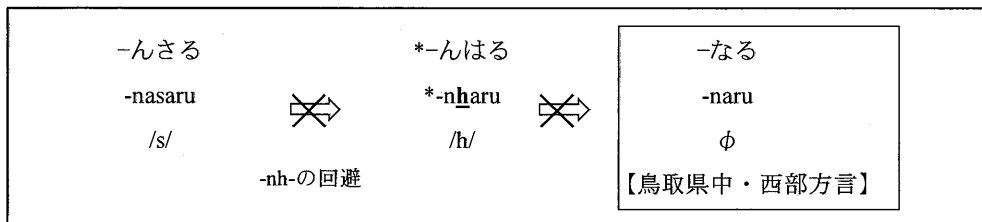


図 11 鳥取県東部方言の通時的派生の限界

また、当該方言において、「-んさい」の /s/ > /h/ の弱化が想定される「*-んはい」も存在しないので、敬意命令形の音韻派生も、敬意断定形と全く同じ過程でなされていると考えられる。これを図 12 に示す。

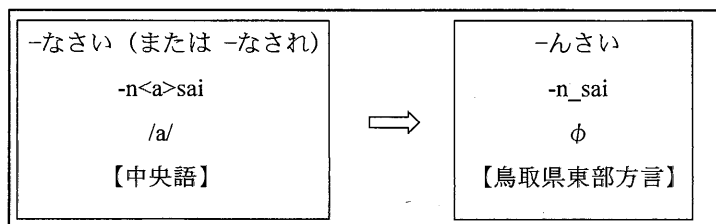


図 12 鳥取県東部方言の敬意命令形の通時的派生の推定

6. おわりに

以上、鳥取県内での、中央語「-なさる」が想起される敬意形の方言形「-なる」「-んさる」について、その通時的音韻派生について推定できる過程について考察した。まず、

中・西部方言にある「-なる」については「-なはる」という古形が残っていることにより、「-なはる (-naharu)」>「-なる (-naru)」で /h/ の消失、また中央語からは「-なさる (-nasaru)」から「-なはる (-naharu)」への変化は /s/ > /h/ の子音弱化の結果であることが推定できた。この /s/ > /h/ > φ の音韻過程は、一般的に世界の諸言語で見られる普遍的なものに一致しており、その意味では正統的な原理に従っているといえる。さらに、敬意命令形「-ない」には、「-なれ」という古形があり、さらに断定形「-なはる」が想起される「-なはれ」も倉吉市の高齢層の一部、また周辺の東伯郡域に残存し、これの発展形である「-なはい」の出現が貧弱であることから、「-なさい」>「-なはい」>「-ない」という中央語からの派生は考えにくく、「-なされ」というやや古い形から「-なはれ」が、さらに「-なれ」が /s/ > /h/ > φ の音韻過程を経て派生し、爾後に「-ない」が語尾の弱化により生じたものと推定できる。

鳥取県東部方言の敬意断定形「-んさる」、敬意命令形「-んさい」は、ともに中央語の「-なさる」から母音 /a/ の消失の結果生じたものであるが、さらなる変化として /s/ > /h/ の弱화가起こらなかったのは、「-んさい (-nsai)」からの /s/ > /h/ 弱화가、音素配列上の理由から回避され、音韻過程が引き起こされなかったのもこのまま留まり、これ以上の音韻変化を被らなかったためと推定される。したがって、「-んさる」「-んさい」から分節音消失によって中・西部方言の「-なる」「-ない」が生じることはなく、結果として東部方言の「-んさる」「-んさい」と中・西部方言の「-なる」「-ない」の間には通時的派生関係は認められないということを結論として導くことができる。

参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1982)『講座方言学 8—中国・四国地方の方言—』
東京：国書刊行会。
- 神部宏泰 (1982)「7 島根県の方言」飯豊他編 (1982), 211-238.
- 神鳥武彦 (1982)「4 広島県の方言」飯豊他編 (1982), 103-140.
- 神鳥武彦 (1998)「I 総論」平山輝男 (編者代表)『広島県のことば』日本のことばシリーズ 34. 3-78, 東京：明治書院。
- 桑本裕二 (2015)「鳥取県倉吉方言における芸能人の名前等のアクセント—メディア経由の標準語アクセントの方言化—」西原哲雄・田中真一編『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』開拓社, 236-253.
- 桑本裕二 (2021)「鳥取県中部および東部方言における平板型アクセントの音調配列の分布と変化」『東北大学言語学論集』第 29 号 (後藤齊教授退職記念号), 63-76.
- 桑本裕二 (2022a)「鳥取県方言と広島県呉市方言の敬意命令形「-んさい」「-ない」について—聞き取り調査と映画「仁義なき戦い」からのデータ分析—」PAIK (関西音韻論研究会) 2022 年 2 月例会 (2022 年 2 月 19 日、オンライン) 配付資料

(PDF).

桑本裕二 (2022b) 「中国 5 県の諸方言に見られる「-なさる」「-なさい」系の敬意表現について—特に鳥取県因幡方言および伯耆方言と広島県安芸南部方言に焦点を当てた形態音韻論的考察—」第 17 回音韻論フェスタ (2022 年 3 月 7 日、オンライン) 配付資料 (PDF).

桑本裕二 (2022c) 「中国 5 県の諸方言にみられるいくつかの敬意表現について—山陰側と山陽側での語用論的対立—」東北大学言語学研究会主催第 1 回研究発表会 (2022 年 3 月 26 日、オンライン) 配付資料 (PDF).

桑本裕二 (2022d) 「映画『仁義なき戦い』に残る広島県呉市方言の敬意命令形「-ない」および「-んさい」について」日本語学会 2022 年度秋季大会ポスター発表 (2022 年 10 月 30 日、オンライン) 『日本語学会 2022 年度秋季大会予稿集』119-124.

桑本裕二・儀利古幹雄 (2016) 「鳥取県倉吉方言における地名のアクセント—尾高型アクセントに注目して—」『東北大学言語学論集』第 24 号 (千種眞一教授退職記念号), 53-67.

森下喜一 (1999) 『鳥取県方言辞典』鳥取：富士書店.

室山敏昭 (1982) 「6 鳥取県の方言」飯豊他編 (1982), 175-209.

室山敏昭 (1998) 「I 総論」平山輝男 (編者代表) 『鳥取県のことば』日本のことばシリーズ 31. 1-34, 東京：明治書院.

虫明吉治郎 (1982) 「3 岡山県の方言」飯豊他編 (1982), 59-101.

中川健次郎 (1982) 「5 山口県の方言」飯豊他編 (1982), 141-173.

友定賢治・有本光彦・水谷美保 (2008) 「II 県内各地の方言」平山輝男 (編者代表) 『島根県のことば』日本のことばシリーズ 32. 23-42, 東京：明治書院.

吉田則夫 (2018) 「I 総論」平山輝男 (編者代表) 『岡山県のことば』日本のことばシリーズ 33. 1-13, 東京：明治書院.

Phonological derivation of honorific forms derived from *-nasaru*

in Tottori Japanese

Yuji Kuwamoto

【Abstract】 This is an analysis of honorific forms *-naru* (declarative), *-nai* (imperative) in Central-Western Dialect and *-nasaru* (declarative), *-nsai* (imperative) in Eastern Dialect in Tottori Japanese. In Central-Western Dialect, an old form *-naharu* is presumably derived from *-nasaru* in Standard Japanese (/s/ > /h/), and then, becomes *-naru* (/h/ > ϕ). An honorific imperative like *-nai* is presumably derived from *-nare* with ending deletion (/re/ > /i/). It is originally derived from *-nasare* in Standard Japanese via *-nahare*, and *-nare* (/s/ > /h/ > ϕ). In Eastern Dialect declarative *-nasaru* is presumably derived from *-nasaru* with vowel deletion (/a/) and **-nharu*

cannot be derived from *-nsaru* (/s/ > /h/) as a result of phonotactics (/nh-/ avoidance), and no further derivations are available. In this analysis, there can be no diachronically derivational correspondence between honorific forms in Eastern and Central-Western Dialect.